



ルソン島の山岳民族

フィリピンは大小七千七百もの島々からなっており、首都マニラは最も大きなルソン島のほぼ中央にある。

このうちルソン、ミランダオ、ネグロス、パラワンレイテ、セブなど十一の大きな島でフィリピン全面積の九六%を占める。フィリ

ピンの人でさえ全く知らない島が半数以上あり、日本の北海道を除いた広さと同様に

大きな違いはフィリピンはたくさん少数民族からなり、百二十を超える言語が存在す

る点である。貧富の差が大きいことが特徴の一つだが、それは民族間格差によるところが大きい。

今回訪れた三月は乾季（十二月～五月）であり、雨季は六月から十一月まで続く。ピナツポ火山の大爆発は記憶に新しいが、火山列島で地震も多く七月から十月にかけて台風がよく来るなど日本によく似ている。

この棚田はイフガオ族が二千年にわたって守り続けたもので、急斜面を山頂まで続く棚

田の景観は「天国への階段」と呼ばれ、実に美しい。

世界遺産登録でイフガオは一躍、有名になったが、実際にここを訪れるのは大変だ。

今回、イフガオ州に隣接するポントック州の州都ポントックに行ったが、それでも大変だった。

首都マニラから高速バスで北部の中心都市バギオまで八時間。こ

こまでは道路も舗装されていないが、そこから先は山の斜面をくねくねと曲がりくねったデコボコ道が多く、ポントックまで六時間がかりだった。

さらにジブニーという乗り合い車でイフガオ州パナウエの世界遺産の棚田に向かう。

パナウエに行かなくても、ポントック周辺でも多少規模は小さいが美しい棚田風景はあちこちで見られ、日本の農村地帯にいるような錯覚に陥るほどだ。

そのイフガオ族を中心とする山岳民族の子どもたちへの奨学金制度が十年前から始まった。妻は担当神父から依頼されて最初から支

援しており、三人目の子どもが昨年、大学を卒業した。

今年三月、新しい奨学生の面接に合わせて昨年卒業した双子の姉妹に会いに行かないかと担当神父から誘いを受けた。

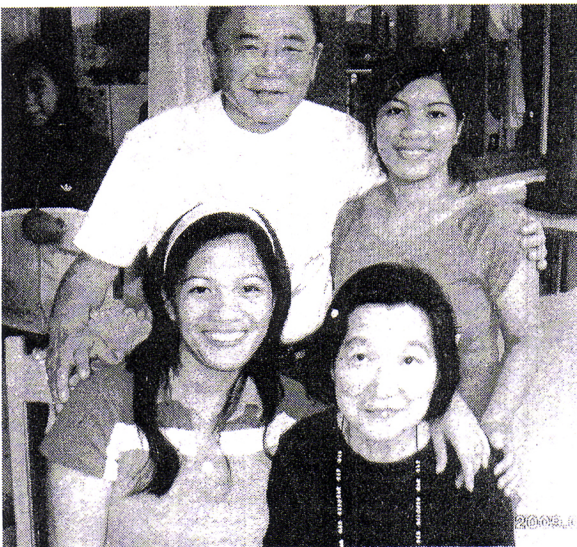
まだ左身にマヒが残る妻を連れてルソン島北部を訪ねたのだ。（元山口放送取締役ラジオ局長）



世界遺産のイフガオ族の棚田

が、ちょうど妻が脳梗塞で実現しなかった。今年三月、新しい奨学生の面接に合わせて昨年卒業した双子の姉妹に会いに行かないかと担当神父から誘いを受けた。

まだ左身にマヒが残る妻を連れてルソン島北部を訪ねたのだ。（元山口放送取締役ラジオ局長）



奨学金を支援した双子の姉妹